

1 「コンテンツ開発・維持」機能（①収集機能、②保管機能、③調査研究機能、④修復機能）に係る現状等の整理

■現状等の整理

学芸員からの意見・現状	市民からの意見	社会的要請・変化
【収集機能・保管機能】 - 博物館資料は、「水と共同体」をテーマとして収集してきたが、都市化以前の状況を示す資料が多い一方で、工業化、都市化が進んだ時期以降の資料は、地域、時代によってかなり手薄な部分がある。今後は、都市化以前の状況を示す資料を継承していくとともに、本市の大きな特徴といえる急激な都市化の進展を示す資料の収集についても方針を検討する必要がある。 - 美術館資料は、本市ゆかりの作家などの美術作品や、グラフィック、写真、漫画、映画等、1980年代当時の人々の生活にかかわりを持ち、都市文化の形成に大きな役割を果たしてきた「複製芸術」を収集してきた。一方で、技術の進歩や表現手法、価値観の多様化等を踏まえると、従来の方針による収集では社会状況を的確に反映した（人々の生活にかかわりを持った）コレクション等を収集することが難しいため、レスキュー状況も鑑みながら、新たな方針を検討する必要がある。 - 現行のデータベースは、収蔵品数の把握のため、それぞれの特性を重視したデータで構成されている。 【調査研究機能】 - 被災前は紀要をはじめ、展覧会、講座等での発表を行ってきたが、被災後は発表の機会自体が減少してしまっている。 【修復機能】 - 博物館、美術館資料ともに、被災状況が酷く、収蔵品としての価値が損なわれる等の理由により一部の収蔵品については処分せざるを得なかったが、被災収蔵品は原則すべて修復することとしてレスキュー活動を進めている。	【収集機能・保管機能】 - 重要だと思ふ機能について、「収集保存」と回答した人は38.8%であり、他の機能と比べて高い。また、博物館・美術館や文化芸術に関心のない層の回答比率も高い。（ア） 【調査研究機能】 「生田緑地ばら苑隣接区域」における「新たなミュージアム」に期待することとして、「調査研究の充実」は、普段から文化芸術について活動していることがある人の回答比率が高い。（ア） 【修復機能】 - 市民ミーティング参加者には、収蔵品の修復・再生に注目している市民が一定数存在していることが、明らかになった。（MG） －凡例－ (MG) …市民ミーティング結果 (ア) …WEBアンケート結果 (シ) …シール投票結果	【収集機能】 - デザイン資産の保護の重要性の高まり - 生活文化等に係る文化資源や無形の民俗文化財の保護の重要性の高まり - 障害者による芸術上価値が高い作品の評価の重要性の高まり - 国策としてのメディア芸術の振興 - クールジャパンコンテンツの拡充・新たに創造される多様な文化芸術資源の保護の重要性の高まり - デジタル技術を活用した表現手法が進化 - 誰もが表現者となり得る時代へ 【保管機能】 - デジタルアーカイブ化（DB化含む）の推進 - 市民参加型のデジタルアーカイブ活動の推進 【調査研究】 - 地域住民を巻き込んだデジタルコンテンツの拡充の推奨 - 他領域の学問分野との連携（自然科学・文学・音楽など） 【修復機能】 - 文化財防災センターの発足 - 気候変動に伴う災害の激甚化・頻発化（令和4年版国土交通白書）

■ポイント

1. これまでの収集方針を踏まえた近現代資料の収集の重点化

- 博物館資料は、地域や時代で手薄な部分がある急激な都市化の進展を示す近現代資料について、これまでの収集方針も踏まえながら、重点を置いた収集や調査研究を進める。
- 美術館資料は、本市ゆかりの作家などの美術作品の収集のほか、「複製芸術」の考え方を見直し、引き続き現代社会を的確に捉えた作品が収集できるよう、「現代美術」などの分類で再整理する。
- 博物館、美術館が融合したミュージアムの実現に向け、共通の収集テーマを設定するなど、横断的な視点での取組を行う。

2. 収蔵品データベースの一層の充実

- 収蔵品の効率的・効果的な収集・保管や柔軟な活用が図れるよう、現行のデータベースに博物館、美術館それぞれの分野をつなぐ横断的な項目を追加し、一層の充実を図る。
- データベース整備までは時間を要するが、自然災害等の有事に備えて充実化は必須であり、現在進めている外部倉庫での保管データとの情報連携も進めていく必要がある。

3. 新たな収蔵品管理方法の検討

- 外部倉庫での管理が、開館後は館内に一元化されることを機に、データベースを活用した新たな収蔵品管理方法を検討する。特に、被災収蔵品の管理や、SDGsの観点を踏まえた温湿度の一律管理の見直しについての検討も行う必要がある。

1. 着実かつ適切な収集・保管活動の実施

- アンケート結果から、収集機能、保管機能について、ミュージアムにとって根幹となる重要なものであるという意識を多くの市民が持っていることがわかった。今後は、被災の経験を踏まえ、ミュージアム活動の基盤として、一層着実な収集・保管活動の実施していくことが重要といえる。

2. 調査研究成果を活用したまちづくりや地域の魅力発信の実施

- アンケート結果から、既に文化芸術活動をしている方々にとっては、「生田緑地ばら苑隣接区域」を開設地とした調査研究活動について、重要な取組として認識している傾向にある。
- 開館後を見据え、調査研究成果を文化観光に連携させるなど、周辺地域の活性化や魅力発信につながるような取組を意識していくべきと考えられる。

3. 「収蔵品の修復・再生」に着目した発信や共有・還元等の活動

- 市民ミーティングでは、「収蔵品の修復・再生」を本市のミュージアムならではの切り口にできるのではないかと発言が多く見受けられた。
- レスキュー作業を進める中で蓄積された修復に関する様々な知見・ノウハウや、モノを未来につないでいくことの重みを伝えていく活動などが、本市の特徴的な取組として展開していくことが重要といえる。

1. 時代の変遷に合わせた、取り扱う分野の再整理

- 国の動向から、昨今はアニメーションやコンピュータ等を活用したメディアアートも重要な文化芸術分野とされて様々な施策が展開されている。
- また、少子高齢化に伴い、無形民俗文化財の一層の保護が望まれているなど、時代の変化に伴い、市民ミュージアムの既存の分野を問わず、取り扱う分野の再整理が必要な状況を迎えている。

2. 市民参加型のデジタルアーカイブ活動の推進

- 博物館法の改正により、博物館の事業として、資料のデジタル・アーカイブ化とその公開が盛り込まれ、さらに、『我が国が目指すデジタルアーカイブ社会の実現に向けて』（令和2年・内閣府）では、地域住民が協働してデジタルアーカイブを構築するプロセスが重視されており、ただデジタルアーカイブを行うだけではなく、市民参加とともに推進していくことが重要と考えられる。

3. 収蔵品レスキュー面での他機関との連携強化

- 頻発する各種の自然災害への対応として令和2年に文化財防災センターが開設されたことを踏まえ、様々な自然災害から収蔵品を守るために連携を強化していくとともに、被災の経験及びレスキュー作業を進める中で蓄積された修復に関する様々な知見・ノウハウについて、他機関への共有・還元も責務といえる。

新たなミュージアムの事業活動のポイント及び具体的な取組（案）について

2 「コンテンツ活用」機能（⑤展示機能、⑥ラーニング機能、⑦地域共創機能）の現状、課題等

■現状等の整理

学芸員からの意見・現状	市民からの意見	社会的要請・変化
【展示機能】 - 博物館、美術館を横断する視点として、「デザイン」は一つのキーワードになるのではないか。 「大衆文化」という当時の人々の生活にかかわりを持った視点は、融合の視点として適していた。 - ボランティアから「常設展と一緒に作りたい」という要望が何度かあったが、固定的な展示で対応できなかった。 【ラーニング機能】 - 出前授業では実物に触れられる考古が最も好評だった。レプリカは運搬もしやすく、体験してもらいやすいのでよい。 本物の民具の体験をさせたいが資料管理上難しい。 地域を記録した映像は優先的に修復。活用しやすい。 - まちなかミュージアムを行うためには、追加の人員・予算が必須。 - まちなかミュージアムの展開にあたって、地域の人々や団体との連携は重要。（アウトリーチ先でどこまで任せられるかは課題） - 展示ケースの運搬を考慮すると、まちなかに固定のサテライトがあった方がよい。 【地域共創機能】 - 川崎フロンターレやオリパラ関連事業などでの等々力緑地周辺のほかでの連携のほか、市内各所の文化協会や郷土史研究グループとも連携した実績があったが、被災後はつながりが希薄になった関係機関もあるので、拠点施設以外での展開も含めて、今後の関係性の継続や再構築していくことが大切。	【展示機能】 - 市民ミーティングでは、市民参加型を含めた新しい展示演出に高い期待が集まった。（MG） - 市民ミーティング参加者から、子どもがガイドを担当するなど、見せるだけではなく、飽きさせない展示手法の提案があった。（MG） 【ラーニング機能】 - 市民ミーティング参加者は、インクルーシブなミュージアムを志向しており、特に子どもに開かれ、子どもから支持されるミュージアムを求める声が多く見られた。（MG） 活動に力を入れるべき対象年齢層として、「小学生」「中学生」の回答比率は、博物館・美術館・文化芸術に対する関心や普段から行っている活動の有無に関わらず高い。（ア） - シール投票結果では、「子どもも過ごせる施設」を希望する回答が全体の中で最も多かった。（シ） - あるとよいと思うプログラムとして、「自分のペースで鑑賞できるプログラム」が、「体験型のプログラム」の回答比率が高い。（ア） - シール投票結果では、触ったり、体験・対話しながら鑑賞できる仕掛けづくりなど、インタラクティブな体験への関心が高い。（シ） 【地域共創機能】 - 取組むべき地域・社会貢献として、「歴史や文化を活用したまちづくり」が最も高く、次いで「地域の魅力の発信」が高い。（ア） 「生田緑地ばら苑隣接区域」における「新たなミュージアム」に期待することとして、生田緑地内の施設連携や回遊性向上の回答比率が28.4%で高い。（ア）	【展示機能】 他者理解を促す「文化的対話」の場となること 省察のための経験の提供・アイデンティティの醸成 - 年齢に関わらず文化芸術の鑑賞等ができる環境の整備 - 誰もがいつでも・どこでも資料にアクセスできる環境の整備 - デジタル技術を活用した文化芸術活動の推進 【ラーニング機能】 社会的弱者に対するサービスの拡充 社会包摂に係る課題への対応 福祉分野における取組の推進 - 学校教育との連携強化 【地域共創機能】 - アートを活用した健康や幸福への貢献 多様な地域的課題・社会的課題への対応 - 文化観光の推進 - まちづくり分野における取組の推進 - 産業の振興についての取組の推進

■ポイント

1. 「デザイン」などのキーワードによる融合展示

- 市民ミュージアムでは、歴史的な資料を「デザイン」の視点で捉える企画展などにおいて、博物館、美術館の融合を実現していたといえる。
- 本市の歴史は、近現代の都市化に大きな特徴があるといえ、美術館資料でも人々の生活にかかわりが深い表現手法や分野を活用し、「デザイン」などのキーワードで博物館資料、美術館資料をつなぐことで、融合した展示の更なる展開が期待できる。

2. 体験型の資料活用への取組強化

- 被災前の教育普及活動では、博物館資料を中心に、実際にモノに触れて体験することのできるプログラムの人気が非常に高かった。
- 今後は、まちなかミュージアムの展開も見据え、触れられる資料の整理をはじめ、レプリカの作成、デジタル化なども検討し、より様々なモノに触れられるような体験・体感型の取組を拡充させていくことが重要といえる。

3. 地域と協働した「まちなかミュージアム」の運営

- まちなかミュージアムは新たな取組であり、これまでの市民ミュージアムの活動実績等を踏まえながら、管理運営体制や運営コストについて綿密な検討を行う必要がある。
- 学芸員だけでなく、市民協働として、まちなかミュージアムを支える人材のあり方や協働方法についての検討も重要といえる。

1. 市民参加型の展示づくり

- 市民ミーティングでは、魅力的な展示演出として、企画段階からの市民参加という意見が多く挙がった。
- ミュージアム側からだけ発信するという展示だけではなく、市民との対話の中で、時には市民が主役となり、展示を作っていくことが望まれているといえる。

2. 子どもや若者を対象とした活動の強化

- 市民ミーティングでの発言、アンケート結果ともに、子どもや若年層に配慮されたミュージアム活動を望む意見が多く挙がった。
- 今後の未来の担い手となる市民を想定し、それらの世代の市民に支持されるような事業展開（体験型やそれそれに合わせたプログラムなど）が重要といえる。

3. まちづくりや地域の魅力向上への貢献

- アンケート結果を中心に、新たなミュージアムに期待される役割として、まちづくりや地域の魅力の発信、生田緑地内の回遊性向上への貢献が望まれている。
- ミュージアムのコンテンツの活用だけでなく、ミュージアムの整備も含めて、周辺地域やまちの魅力向上に貢献していくことが必要といえる。

1. 他者理解や省察を促す展示等の活動

- ICOM（世界博物館会議）の博物館定義により、博物館は他者への理解を促す「文化的対話」の場であり、省察の経験を提供する場であるとされていることから、新たなミュージアムの展示等の活動においては、対話や様々な省察を促す内容を検討していくことが必要といえる。

2. 社会的包摂や健康・幸福の実現につながる活動の強化

- 国内外の様々な文化施策や法整備等の動向を踏まえ、ミュージアムの活動を通じて、社会的弱者に対する配慮などをはじめとし、社会的包摂や健康・幸福（ウェル・ビーイング）の実現につながる活動を強化していくことが求められているといえる。

3. 地域・社会課題解決への貢献

- 博物館法の改正により、博物館に求められる役割として、「多様な地域的課題・社会的課題への対応」が示され、ICOMやOECDが平成31年にまとめた「文化と地域発展」の中でも、地域課題や社会課題に対応すべきことが記載されている。
- 新たなミュージアムでは、福祉、観光、産業など、様々な分野とつながりを持ち、連携することにより、地域や社会をより良いものにするための活動を展開していくことが求められている。

新たなミュージアムの事業活動のポイント及び具体的な取組（案）について

3 「つながり創出」機能（⑧人材育成機能、⑨交流機能）の現状、課題等

■現状等の整理

学芸員からの意見・現状	市民からの意見	社会的要請・変化
【人材育成機能】 ● 作品を展示するだけでなく、多くの人々に文化や歴史、アートに興味・関心を持ってもらえるような取組を考えていく必要がある。 ● 開館までに、ボランティアなど館運営に携わることができる人材のあり方や連携スキーム、導入に向けたタイムスケジュールを考えていく必要がある。 【交流機能】 ● 美術系では、作家とのつながりを活かして、連携事業を企画していく可能性がある。 ● 歴史系では、地域人材・資源との連携はある。 ● アートコミュニケーター「ことラー」の活動とミュージアムのボランティア活動を棲み分け、効果的に連携していく必要がある。 ● 大学、企業と連携したワークショップ、障害者や高齢者を対象とした取組、企業や個人が所有している過去の写真や映像をデジタル化する取組などにより、様々な交流が生まれてきた。 ● 被災を経験した館として、これまで多くの関係機関から援助・支援を受けてきたことを踏まえ、情報発信や研修等を通じて、防災や修復についての知見・ノウハウの還元を行っていききたい。	【人材育成機能】 ● 活動や育成支援に力を入れるべき対象として、「文化財やその継承に関心がある人たち」や「地域や社会に貢献してみたいと考える人たち」、「若手アーティストやアーティストを目指す人たち」といった、意欲や関心のある市民の育成や活動支援をすべきという回答が多い。（ア） ● 市民ミーティング参加者からは、「人材の獲得や育成」についても意見が多く集まった。（MG） 【交流機能】 ● 市民ミーティング参加者からは、「市民参加を通じた交流、つながりや連携の創出」を重視する声が多かった。（MG） ● あるとよいと思う交流の機会として、「体験の共有や世代を超えた交流」の回答比率が、年齢や博物館・美術館・文化芸術に対する関心の有無、博物館・美術館の利用頻度、普段から行っている活動の有無に関わらず高い。（ア）	【人材育成機能】 ● 文化芸術を通じた次代を担う子供たちの育成 ● 地域の文化継承の担い手の育成 ● 障害者の文化芸術活動の促進（創作・鑑賞・発表など） ● 学芸員その他の博物館人材の育成（ボランティア含む） ● 障害者の文化芸術活動をサポートする人材の育成 ● デジタルアーカイブ人材の育成 【交流機能】 ● 他の博物館等との連携 ● 大学や企業等との連携 ● 多様な主体との連携 ● 地域社会や一般市民とともに活動すること ● 来館者と作家との触れ合いの促進 ● 国際交流等の分野における取組の推進

■ポイント

1. 文化芸術への入口となる、親しみやすい取組の展開

- 市民ミュージアム旧施設に市民が一般利用できる版画機器を備えたアトリエがあったように、作品の展示だけでなく、気軽に創作等が体験できる場の提供など、誰もが文化芸術に親しみ、楽しめる環境づくりを展開する必要がある。

2. 「ことラー」など、ミュージアムの活動や運営を支える主体との協働

- 本市が東京藝術大学と連携して進めているアートコミュニケーター「ことラー」の活動が新たなミュージアムにつながることを踏まえ、市民ミュージアムがこれまで築いてきたボランティア組織との棲み分けを整理する。
- レスキュー活動を通じて生まれたつながりも活かしながら、様々な主体との協働について、相乗効果を発揮できるスキームの構築や取組の展開が重要といえる。

3. アーティストや地域人材などとの連携強化

- これまでの市民ミュージアムでは、博物館分野では地域の人材とのつながりがあったといえるが、美術館分野では恒常的なつながりはあまり多くなかったことから、今後は、地域で活動するアーティストなどとの連携も強化し、今まで以上に様々な交流を図っていくべきといえる。

1. 市民の文化芸術活動の積極的なサポート

- アンケートでは、文化芸術活動に意欲・関心のある市民に対しての育成や活動支援を求める方が多くいることがわかった。
- 文化芸術が身近に感じられるような、誰もが親しみ、楽しみやすいプログラムのほか、普段から自主的に文化芸術活動に携わっているような意欲・関心の高い市民のニーズにも目を向けることが大切であり、自主的な文化芸術活動をサポートするなどして市域の文化芸術やその担い手を育むことが重要と考えられる。

2. 市民を巻き込んだ交流ネットワークの構築

- ミュージアムが取り組むべき社会的役割や取り組むべき活動として、市民ミーティングの参加者の多くが重視したのは「市民参加を通じた交流、つながりや連携の創出」だった。
- 新たなミュージアムには、文化芸術を介して市民や地域の交流を育む拠点となり、様々な主体をつなぐ役割が求められているといえる。

3. 世代間連携の促進

- アンケートでは、「体験の共有や世代を超えた交流」が多くの回答者から求められていた。
- 少子高齢化が進む中、上の世代が下の世代とともに体験を共有する機会や知識や経験を伝えられるような交流の創出は、今後より一層必要なものになると考えられる。

1. 文化芸術を未来につなぐ担い手の育成

- 「文化芸術推進基本計画」や「教育振興基本計画」、「文化経済戦略」では、「文化芸術を通じた次代を担う子供たちの育成」や「地域の文化継承の担い手の育成」が推進されている。
- これらの国の施策を踏まえ、新たなミュージアムでも、文化芸術を未来につなぐ担い手を積極的に育成していくことが必要といえる。

2. ミュージアムの運営を支える人材の育成

- 博物館法の改正により、博物館の事業として「学芸員その他の博物館人材の養成及び研修」が盛り込まれ、「障害者文化芸術推進法」では、障害者の様々な文化芸術活動をサポートする人材の育成が施策のひとつとされている。
- 文化芸術の担い手の育成だけでなく、様々な面でミュージアムの運営のサポートができる人材を育成することも重要となっている。

3. 市民や地域、企業等の多様な主体との連携

- 博物館法の改正により、地域の多様な主体との連携や、他の博物館との連携が重要視されている。また、「アートと経済社会について考える研究会報告書」（令和5年・経済産業省）では、企業と美術館等の連携促進の必要性が指摘されている。
- 法改正や社会動向を踏まえ、様々な主体と連携することで、ミュージアム活動の可能性を広げていくことができるといえる。

新たなミュージアムの事業活動のポイント及び具体的な取組（案）について

■ 基本的な取組（案）

1 「コンテンツ開発・維持」機能	2 「コンテンツ活用」機能	3 「つながり創出」機能
● 収集方針に基づく資料・作品の収集及び保管【拠点】 ● デジタル・アーカイブ化、デジタル・アーカイブの運用【拠点】【まちなか】 ● 収蔵品を活用した調査研究【拠点】 ● 被災収蔵品の修復作業【拠点】 ● 市民・専門学生向け修復ワークショップ【拠点】【まちなか】 ● 修復状況の定期的な発信【拠点】【まちなか】 ● 近現代資料に重点を置いた寄贈調整【拠点】 ● 他館等と連携した調査研究【拠点】【まちなか】	● 常設展示、収蔵庫展示、大規模企画展・巡回展【拠点】 ● ラーニング・プログラム（館内受入を含む社会化教育推進事業等）【拠点】【まちなか】 ● 被災前に実施していた各種プログラム（障害者・高齢者向け、ママカフェ、対話型鑑賞など）【拠点】【まちなか】 ● 図書館・市民館・商業施設等での企画展やワークショップ【まちなか】 ● 小・中学校への出張プログラム【まちなか】 ● 社会福祉施設等への出張プログラム（回想法など）【まちなか】 ● アートコミュニケーター「ことろー」との連携プログラム【拠点】【まちなか】	● ミュージアム活動を通じた地域とのネットワークの構築【拠点】【まちなか】 ● 展覧会やワークショップ等に関する人材の育成【拠点】 ● 応急処置や修復に関する人材の育成【拠点】 ● 学芸員やアーティストなどを指導する人の育成支援【拠点】 ● 多様な能力をもった分野横断的な人材の育成【拠点】

■ 特徴的な取組（案）

…ミュージアム（拠点施設）での取組	…まちなかミュージアムでの取組	開発	…コンテンツ開発・維持機能	活用	…コンテンツ活用機能	創出	…つながり創出機能	 …主として対応する機能  …関連する機能
-------------------	-----------------	----	---------------	----	------------	----	-----------	--

STEP 0 開館前（準備期間）

→ミュージアムの開館を広く市民に知らせ、開館までの機運を醸成する取組を「まちなかミュージアム」として実施。



地域に由来する資料を活用したワークショップの実施
古文書、映像記録、絵図等、市内各地域に由来する資料を用いて、地域の理解を深める。



市民参加型の地域映像発掘
家庭に眠る8ミリビデオを持ち寄り、みんなで鑑賞しながら川崎の地域映像を発掘する。



修復報告展
修復済資料の公開や、記録映像等を使ったプロセスの紹介を定期的に市民に発信していく。（開館後も継続していく想定）

- 新しくデジタル化した資料のWEB上での公開や利活用の促進
- 市民参加型のデータ・資料収集
- 博物館、美術館の融合による調査研究（開館後の企画展準備など）
- 「モバイル展示・体験セット」の試験的な運用と改良
- より市民に身近な場所（商業施設等）でのワークショップ（工芸体験等）
- 地域ですでに活動している市民のスキルを活用した市民連携によるアウトリーチ活動の強化
- ボランティアを組織化し、開館前の各種事業をボランティアとともに企画・実施するなど

STEP 1 開館当初

→開館前までの取組の蓄積を継承しながら、館が主導して拠点施設、まちなかミュージアムの運営の安定的な展開を図る。



市民とつくる展示等
開館前に行った市民参加型の調査や活動に基づく展示やイベントを実施。市民とともにあるミュージアムとしてのめざす姿を開館時に明確に示す。



博物館、美術融合企画展
博物館、美術館の分野を横断する視点（デザイン等）から、開館前に調査研究や企画、準備を進め、開館をアピールする企画展を実施。ミュージアムの特徴を市民に発信する。



モバイル展示・体験セット
オリジナルのモバイルミュージアムセットを作り、サテライトが展示ができるようにする。



まちなかエデュケーションひろば
こどものための美術や歴史文化の体験スペース。子どもが楽しみながら学べる創作や昔体験の場をまちなかの施設で展開。



「直す・大事にする」ワークショップ
市民に大事にしているものをもってきてもらい、それらを直す体験ワークショップを行う。

STEP 2 開館後（2～3年後）

→様々な市民参加型の取組にチャレンジ。市民の誰もがプレイヤーとなれる包摂的なミュージアムとしての姿を確立。



収蔵庫展示での市民によるガイドツアー
市民有志にオリジナルの解説ルートを考えてもらい、定期的なガイドツアーとして市民目線での収蔵品紹介を行う。



川崎市ミュージアム処方箋
川崎市内の医療機関と連携スキームを組み、現在欧米で進んでいる「ミュージアム処方箋」の取組を展開する。



「ミュージアム・クラスター」による連携イベント
生田緑地内の他のミュージアムをはじめ、周辺大学等とも連携し、エリア一帯でのイベントや企画展等を行う。



みんなのメモリーズキャラバン
高齢者福祉施設等を対象に、複製資料（3D出力やデジタル）をもって巡回し、資料に紐づく昔の記憶を収集する。回想法的なねらいも含む。



若手アーティストと作る川崎アート地図
アーティストの視点や感性から川崎の新たな一面を発掘していく。匂いや音などユニバーサルな体験から川崎を捉える。

STEP 3 開館後（～10年後）

→市内の様々な機関とのネットワークを構築し、外部連携機能を強化してミュージアムの活動を市全体に波及させる。



みんなで考える川崎展示・地域課題事業
市民が考える未来像や、企業の開発試作品、市のビジョンなどを紹介する展示。運動シンポジウムなども実施する。



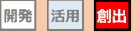
市内の多様な機関と連携した企画展
社会福祉機関、医療機関、企業など、ミュージアムの枠を越えて、新たに関係を構築した機関とともに大規模な企画展を実施する。



市民企画のサテライトミュージアム
市民が、自分で管理している場所を使い、好きな資料（複製）を借用したり自分のもっている資料を組み合わせたりオリジナルミュージアムを展開できる。



空き家アーティストインレジデンス
市内の空き家や企業の遊休資産を間借りして、まちなかにアーティストインレジデンスを展開する。



まちなかMマッチングデータベース
まちなかの施設や文化芸術団体、ミュージアムのデジタルアーカイブの情報を集約し、連携を生むデータベースを作る。

参考事例

① DESIGN MUSEUM JAPAN展／NHKプロモーション

クリエイターの視点から日本各地の暮らしに根差したデザインを紹介



1万年前の縄文時代の暮らし方から、21世紀のプロダクトまで、日本人が作って来た様々なモノやコトを、世界の一線で活躍するクリエイターが全国各地でリサーチし、「デザインの宝物」として一堂に展示。

④ 親子のフリーゾーン／横浜市民ギャラリーあざみ野

子どもの自由な創作活動のために開放されるフリースペース

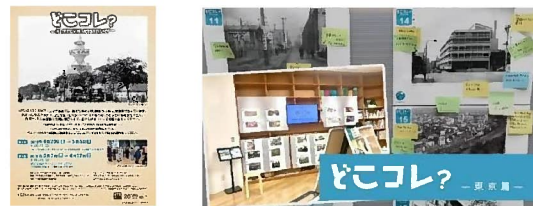


出典：横浜市民ギャラリーあざみ野JP

子どもが「やってみたい!」という気持ちを大切に、粘土や紙、絵の具を使って自由に創作ができる。月に3回開放している。(美術館ではなく、美術を通じた市民の交流を目的とした公共施設の一角)

⑦ どこコレ／せんだいメディアテークほか

古写真をベースに、地域の昔の姿に関する市民からの情報を収集する



出典：せんだいメディアテークHP

出典：お茶ナビゲートHP

地域の古写真に関する情報を、市民の記憶を通じて集めていくプロジェクト。せんだいメディアテークによって始められ、現在は国内各所で実践されている。

② 貸出キット「きゅうぱっく」／九州国立博物館

博物館資料を活用した学校向けの貸出キット



出典：九州国立博物館HP

博物館に展示してあるのと同じモノ、音や匂いを体験することのできるツールなどをトランク型のキットにして学校へ無料で貸出している。キットは16種類あり、目的に応じて選ぶことができる。

⑤ Re-construction tourism

／熊本城

熊本城の石垣修復の様子を見学するガイドツアー



出典：『令和4年度『文化資源の高付加価値化』課題解決への事例集』

熊本城最大の見どころである「石垣」の修復に携わる専門家や石工職人の案内で、実際の作業現場を巡る。(最小催行人数4名、料金は一人につき5,000円～。所要時間は90分。)

⑧ 鉄とコンクリートの守り人／Whole Earth Foundation

位置情報を連動させ、まちのデータをみんなで収集する参加型ゲーム



出典：Whole Earth Foundation HP

日本のインフラ老朽化問題に対処するために作られた、位置情報ゲーム。プレイヤーは、日本全国にあるマンホールの蓋を撮影し、ダメージ状態を投稿することで、ポイントや特典を得ることができる。

③ アートエクスプローラー ／MuMo・ボンビドーセンター

フランス中を旅する移動型美術館



出典：アートエクスプローラーHP

フランス全土を巡回するビークル型の移動美術館。年に2回のテーマ別展示で、近現代美術の作品を地域に届ける。

⑥ ギャラリーガイドボランティア ／ブリティッシュコロンビア大学人類学博物館

多様な背景をもつボランティアが独自の視点からガイドツアーを実施



出典：Museum of Anthropology University of British Columbia HP

様々な背景や興味、経験をもったボランティアが、30～55分程度の展示のガイドツアーを行う。

⑨ BIOME／バイオーム

虫や植物の情報を位置情報とともにアップしてみんなで共有するアプリ



出典：(株)バイオーム「PR TIMES」

写真を撮った季節と場所からいきものの名前を判定し、図鑑やマップ、SNSなどでいきものにまつわる様々な機能を提供し、コレクションしていくアプリ。

参考事例

⑩ O博アーカイブbyぼこ／南アルプス市教育委員会

デジタルマップ上に子ども達の調べた内容をプロットして集約



出典：「O博アーカイブ by ぼこ」をスクリーンショット

地域のかくれた魅力を、子供たちが地域の方々に聞き取って調べ、発信するアーカイブ。情報はWEB上のデジタル地球儀にマッピングされて公開されている。※「ぼこ」とはこの地域の方言で子供のこと。

⑪ 大阪市立図書館デジタルアーカイブ／大阪市立図書館

オープンデータ利活用



出典：大阪市立図書館HP

著作権が終了したものを中心に、デジタルアーカイブ画像をオープンデータ化し、ビジネスや学校での利活用を促進している。

⑫ 路上博物館／路上博物館

3Dプリントで出力した標本を街中に持ち出し、博物館への興味を喚起



出典：路上博物館HP

博物館の骨格標本を3Dデータ化し、プリントしたものを各種イベントで展示し、手で触ってもらう。プリントされた標本グッズを販売を、売上は本物の標本作りの費用に充てることも狙う。

⑬ ミュージアム処方箋／モントリオール美術館

美術館への訪問を医師が健康の改善のために処方する仕組み



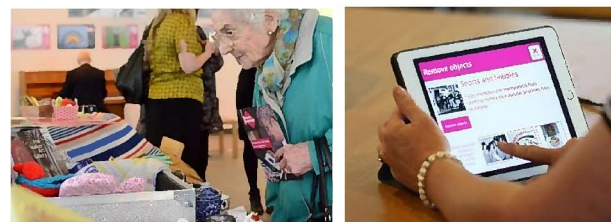
出典：モントリオール美術館HP

出典：DAVID BOILY / AFP

地域の医師会が、患者の健康回復を促進する治療の一環として、美術館への訪問を実際に「処方」する。心身にさまざまな健康問題を抱えた患者たちと家族などが、美術館で芸術の健康効果を体験できる。

⑭ ハウスオブメモリーズ／リバプール国立博物館

モノや画像から認知症患者の会話を促す様々なツール



出典：リバプール国立博物館HP

博物館が保健医療分野向けに作成した認知症啓発プログラム。思い出の品や写真等を通じて、会話を促すコレクションのパッケージや、同様の体験を提供するアプリ、移動型ミュージアム等を展開。

⑮ 老いパーク／日本科学未来館

高齢化社会の未来を疑似体験をして自分ゴトにしていく展示



出典：日本科学未来館HP

老化による目・耳・運動器・脳の変化を疑似体験し、老化現象が起こるメカニズムや対処法、将来身近になるかもしれないサポート技術などをしながら、自分自身の老い方を考えていく常設展示。

⑯ 未来ステーション／鉄道博物館

鉄道の未来を疑似体験し、よりよい姿を投稿によりみんなで考える展示



出典：ハニカムラボHP

出典：鉄道博物館HP

自分の分身（アバター）を作成し、現在の最新の研究により想像される未来の社会と鉄道の姿を知った上で、アイデアを投稿してもらい、よりよい鉄道の未来をみんなで創造していく常設展示。

⑰ 黄金町エリアマネジメントセンター

鉄道の高架下を活用したアーティストインレジデンス



出典：Kyoto Art Center「FAIR_J」HP

小規模の空き店舗や京急線高架下の文化芸術スタジオを活用した複数のスタジオをアーティストインレジデンスとして活用。アーティスト同士や地域を通じた刺激の環境で制作を行なうことができる。

⑱ エノコンシェルジュ／江之子島文化芸術創造センター

文化芸術を通じた地域の課題解決の相談窓口



出典：江之子島文化芸術創造センターHP

アートだけにとらわれず文化芸術を通じて地域活性やまちの魅力づくりなど様々な課題解決に取り組む方々に解決のヒントや課題解決に向けたアドバイスを行う。関係団体へつなぐこともする。